

## 103 《聖マタイの召命》

全ての身体動作を読み取る必要性

2024

真鍋友範

### 1 描いた画家への敬意とは

絵画を鑑賞するとき、描かれた内容については、できる限りその意味を知ろうとすることは、いわば常識だろう。バロック絵画である、カラヴァッジョ作《聖マタイの召命》と対面しても、同じく誠実に向き合い、その内容を汲み取ろうとするのは、通常の鑑賞態度だろう。

この絵画のある現地ローマのサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂においても、我々は、同様の鑑賞態度だろうか。

その答えは、否だ。

何故か。答えは簡単。全容が見えないのだ。



《聖マタイの召命》展示状況（左）

## 2 何が見えないのか

イエスの右腕の先端がよく見えない。

イエスの左手がよく見えない。

イエスの足元がよく見えない。

弟子ペテロの右腕がよく見えない。

弟子ペテロの足元がよく見えない。

髭男の指先もよく見えない。

髭男の帽子のコインが見えない。

眼鏡男の背中との角度がよく見えない。

眼鏡男の頭頂部の光点がよく見えない。

こちらに向かって座る若い納税者の視線が、イエスの後ろに向かってるのがよく見えない。

## 3 細部がよく見えないことの影響

【見える部分だけで、独断的に判断する】傾向が生まれる。

イエスの右手の指先が力なく曲がっていることにもかかわらず、イエスは指差していると誤判断する。

髭男の親指が立っていることを見ながらも、それは無視して、髭男がイエスに問い返した場面であると誤判断する。

## 4 結論

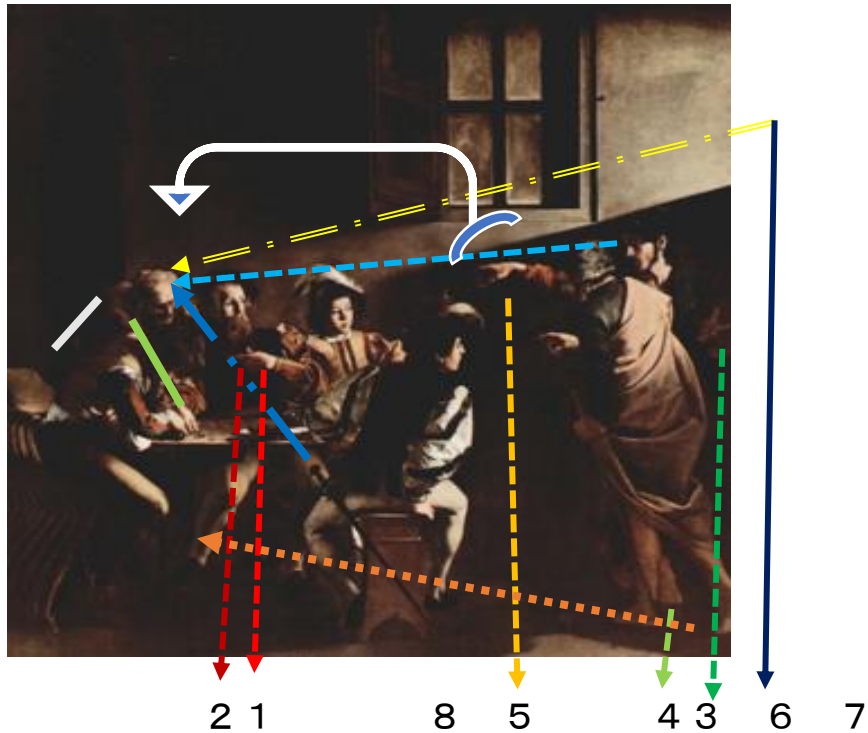
カラヴァッジョの《聖マタイの召命》を語るなら、他者や過去資料の棒読みではなく、自らの目で、その隅までしっかり検討し、全ての身体動作を検証し、信じられる内容のみを、自らの言葉で語る姿勢が必要だ。

400年前の、カラヴァッジョ嫌いの美術史家の解説を、疑うこともなく信用すべきでないだろう。

また、デッサンに基づかず、【~かのように見える】、とか、根拠もなく、【~と信じられる】のような、観念的断定には、解説に全く説得力がないのだ。

補足：

### 《聖マタイの召命》 真実のストーリー



- 1) 親指を胸に当てる髭男の動作「私をお探しですか」（連続動作・前半）
- 2) 人差し指の動作「それとも、隣のメガネの収税人ですか」（連続動作・後半）
- 3) イエスは、左手を広げて質問に返答する「答えよう」
- 4) 右足の一步左側への位置移動

>>>>その意味は、【メガネの収税人の顔が見える位置への視点移動】  
【決して、召命も終えることなく、イエスが帰ろうとしているのではない。】

- 5) イエスの右腕・手首の回転動作  
【手首より先に力無し・指差し動作では無い】

\*イエスの右手は、メガネ男の顔付近で回転を停止している。（普遍的動作）

（ライトブルーの線）

参考6) 右高窓から、父なる神からの一条の導きの点光が侵入する。（イエロー点線）

参考7) ペテロの両足の軸線は、メガネの収税人の足元に向かっている。（オレンジ点線）

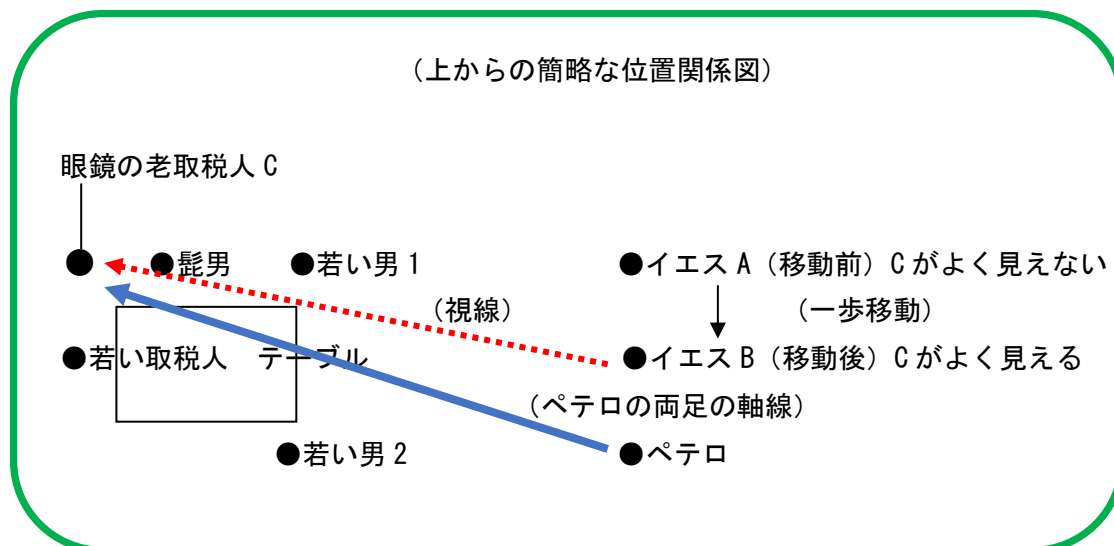
参考8) 背を向けて腰掛けている男の腰の剣の軸線は、メガネの収税人の光点に

向かっている。（ブルー点線）

イエスに呼ばれたマタイは、（右手を机に突いて寄りかかった姿勢から）立ち上がり、イエスに従ったのだ。（注：マタイ福音書に、マタイは、椅子から立ち上がったとは記述され

ていない。)

\* あなたも眼鏡の収税史と同じ、45度に背中を傾けた傾斜維持姿勢（ライトグレー）を真似て、長時間同じ姿勢を維持しようとする、100パーセント右手を机に突いた姿勢になる。（ライトグリーン）



\* 質問する髭男の【向こう側】にいる人物は、ただ一人。  
召命対象者は、眼鏡の老収税人だ。

